

2022年度 東洋大学 IR ニュースレター Vol.3 (通算第8号)

「全国学生調査」から見た東洋大学の学生の学習と成長

分析担当: IR室 教授 劉文君



東洋大学
学長・IR室長 矢口悦子

文部科学省による2021年実施の「全国学生調査」の結果が示され、同調査に参加した本学のデータも提供されました。本学の学生たちの回答は、学習時間や大学での学習への満足感において、全国の結果より優位であるとの結果が示されています。また、授業へのアシストについては、他大学より少なかったと回答されていることも明らかになりました。ここでは全体的な傾向を紹介するにとどまりますが、今後さらに詳細な分析を重ねることで、この調査を有効に活用してまいりたいと考えております。

1. はじめに

文部科学省は、令和3年度「全国学生調査(第2回試行実施)」を実施した(国立教育政策研究所と共同)。当調査は、「学修者本位の教育への転換」を目指す取り組みの一環として、全国共通の質問項目により、学生目線から大学教育や学びの実態を把握し、大学の教育改善や国の政策立案など、大学・国の双方において様々な用途に活用することを目的とするものである。調査期間は、令和4年1月31日(月)～2月28日(月)。調査対象は試行実施に参加意向のあった582大学に在籍する学部2年生(約47万人)及び4年生等(約48万人)、並びに参加意向のあった短期大学157校に在籍する2年生以上(約2.5万人)。本学においては、調査対象者数15,417人、回答者数1,246人、回答率8.1%となった。回答者のうち第1部の学生は1,123人である。表1に示すように、全国の回答者と比べ、本学のサンプルは社会科学系のウェイトが高い。人文、理学・工学、家政の構成比は全国とほぼ同じである。

本ニュースレターでは、いくつかの側面から全国の回答結果との比較を行い、本学の特徴を明らかにし、今後の課題を検討する。

表1 全国及び本学の回答者の学問分野と学年の分布

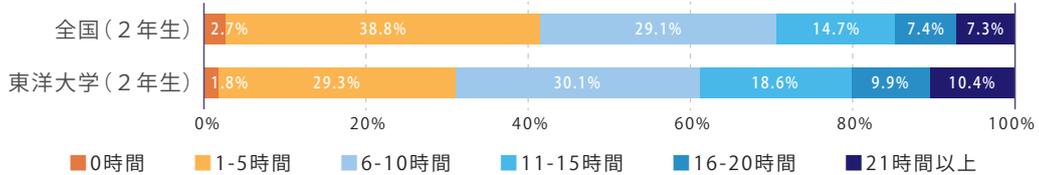
全国	本学	全国		本学	
		実数(人)	構成比(%)	実数(人)	構成比(%)
人文	文学部	13,128	15.5	189	16.8
社会	経済学部、経営学部、法学部、 社会学部、国際学部、 国際観光学部、国際地域学部	15,901	18.8	455	40.5
理学・工学	理工学部	16,560	19.6	213	19.0
家政	食環境科学部	3,440	4.1	47	4.2
その他	ライフデザイン学部・ 総合情報学部・情報連携学部	35,457	42.0	219	19.5
計		84,486	100.0	1,123	100.0
学年構成	2年生	59,559	53.0	608	54.1
	4年生以上	50,314	44.8	515	45.9
	6年生以上	2,468	2.2		
計		112,341	100.0	1,123	100.0

2. 学習時間の比較

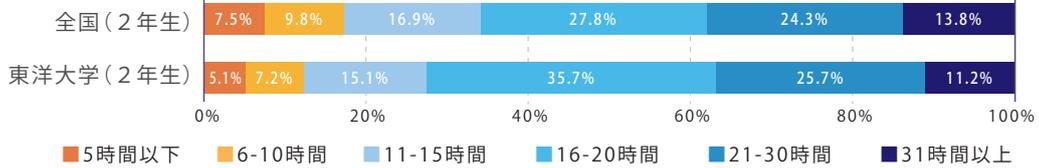
図1は、設問「今年度後期の授業期間中の平均的な1週間（7日間）の生活時間は、それぞれどのくらいですか」において、「予習・復習・課題など授業に関する学習」「授業への出席（実験・実習、オンライン授業を含む）」に対する2年生による回答結果の全国と本学の比較を示している。図に示すように、<0時間>と<1-5時間>の割合は、全国はそれぞれ2.7%、38.8%、本学はそれぞれ1.8%、29.3%と低い。加えて、6時間以上の各時間帯の割合は本学の方が高い結果を得ている。すなわち、本学の2年生の「予習・復習・課題など授業に関する学習」時間は全国より長く、「授業への出席」も同じ傾向が見られる。

図1 学習時間

予習・復習・課題など授業に関する学習



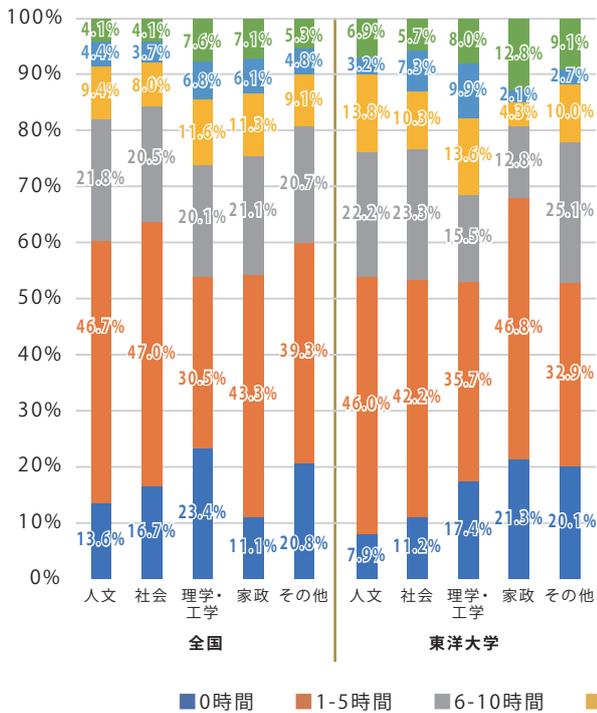
授業への出席



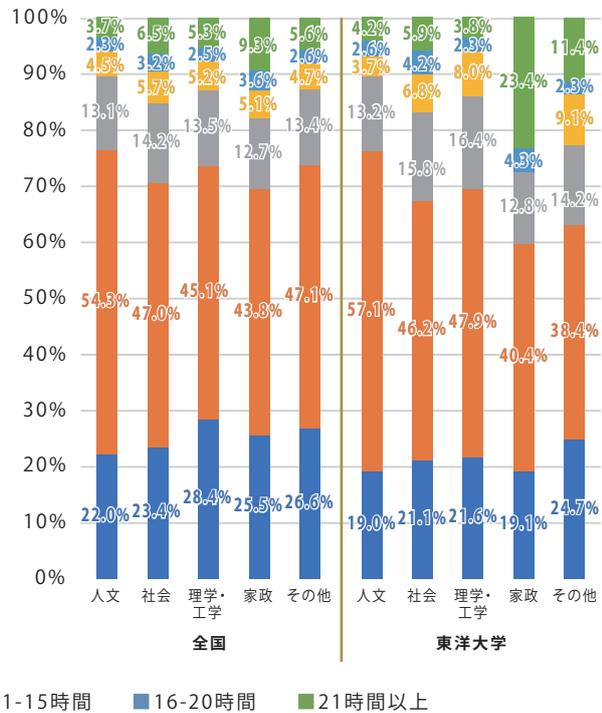
また、図2に示すように、分野別（2・4学年合算）の結果を比較しても、本学の学生は「予習・復習・課題など授業に関する学習」「授業の予習・復習・課題以外の学習」の時間が全国よりも長い傾向が見られる。

図2 学習時間・全国の分野別との比較

予習・復習・課題など授業に関する学習

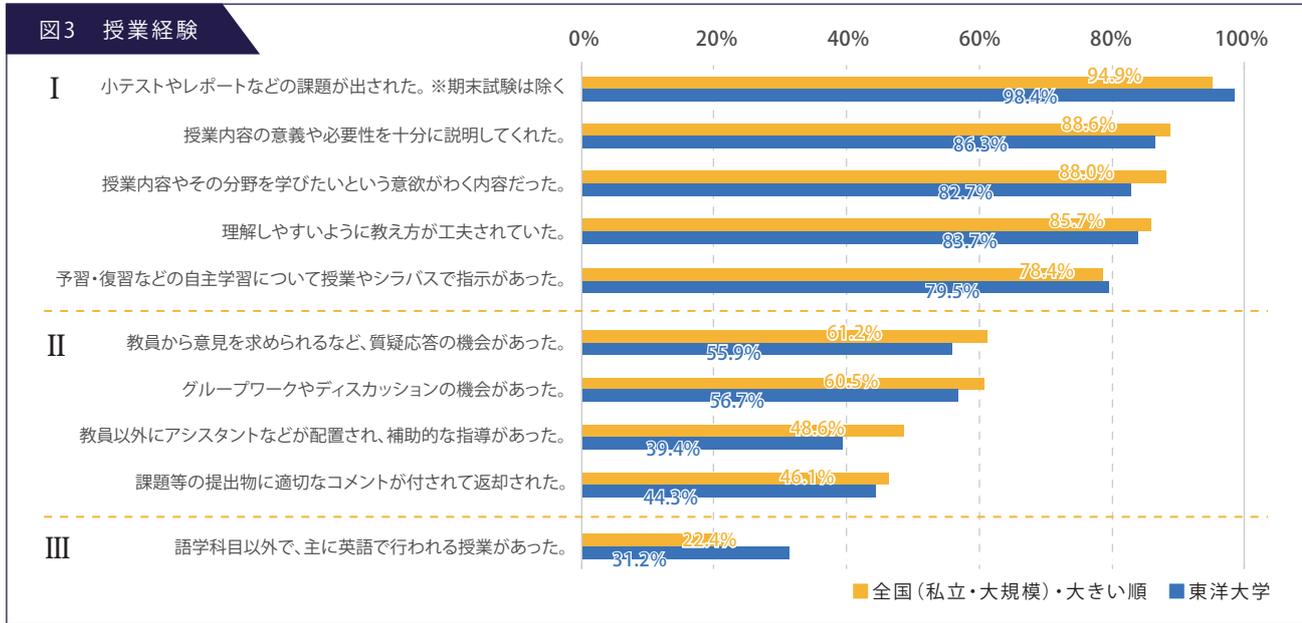


授業の予習・復習・課題以外の学習



3. 授業での経験

図3は設問「大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか」に対して、<よくあった>または<ある程度あった>と回答した割合における全国（大規模私立のみ、n=19,626）との比較を示している。大多数の項目で本学は全国とほぼ同じ傾向にあり、図中でグループIとした各項目で割合が高く、教員と学生とやり取りを行ういわゆる双方向型の授業の項目からなるグループII、グループIIIの割合が比較的低くなる。しかしながら、顕著な差が見られる2つの項目があり、「教員以外にアシスタントなどが配置され、補助的な指導があった」は本学（39.4%）が全国（48.6%）より低く、「語学科目以外で、主に英語で行われる授業があった」は本学（31.2%）が全国（22.4%）より高い。



4. 「授業での経験」と「身に付いた知識能力」との相関

表2 「授業での経験」と「身に付いた知識能力」との相関（東洋大学サンプルのみ）

		専門分野に関する知識・理解	将来の仕事につながるような知識・技能	外国語を使う力	問題を見つけて解決方法を考える力	幅広い知識、ものの見方
I	授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれた。	.409**	.372**	.250**	.349**	.325**
	授業内容やその分野を学びたいという意欲がわく内容だった。	.489**	.402**	.239**	.382**	.417**
	理解しやすいように教え方が工夫されていた。	.404**	.324**	.250**	.333**	.351**
	予習・復習などの自主学習について授業やシラバスで指示があった。	.299**	.227**	.206**	.243**	.265**
	小テストやレポートなどの課題が出された。※期末試験は除く	.048	.072*	.060*	.090**	.059*
II	教員以外にアシスタントなどが配置され、補助的な指導があった。	.241**	.267**	.150**	.232**	.132**
	課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却された。	.263**	.233**	.246**	.250**	.219**
	グループワークやディスカッションの機会があった。	.266**	.272**	.233**	.297**	.257**
	教員から意見を求められるなど、質疑応答の機会があった。	.242**	.176**	.262**	.260**	.211**
III	語学科目以外で、主に英語で行われる授業があった。	.137**	.134**	.359**	.193**	.189**

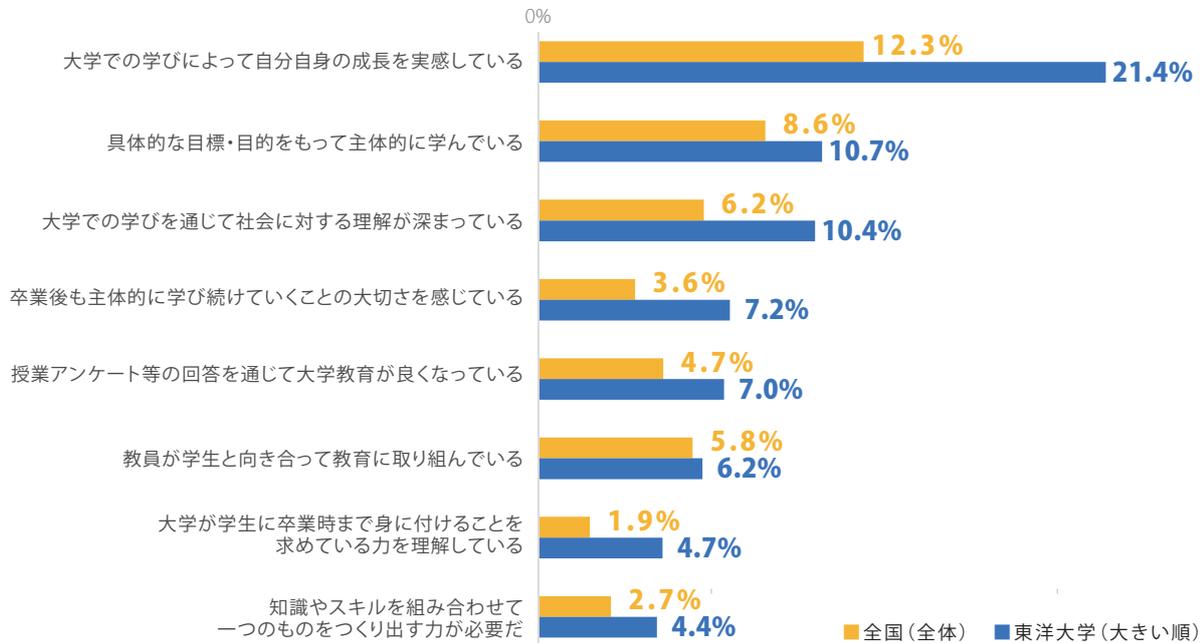
**、相関係数は1%水準で有意(両側)。*、相関係数は5%水準で有意(両側)。

表2に示すように、各種「身に付いた知識能力」に、図3の「グループI」（「小テストやレポートなどの課題が出された」を除く）の各項目はいずれも有意な正の相関関係にある。また、グループIIも各項目に有意な弱い相関が見られる。グループIIIでは「語学科目以外で、主に英語で行われる授業があった」ことが「外国語を使う力」に対して最も効果的であることが示されている。

5. 学生の成長実感

図4は設問「これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか。」に対する全国、東洋大学それぞれの4年生と2年生の肯定的な回答（<そう思う>または<ある程度そう思う>）の割合の差を示している。各項目で、本学の4年生と2年生の肯定的な回答の差が全国より大きく、本学の学生は全国と比較し「成長実感」がより高い。

図4 全国、東洋大学の4年生と2年生肯定的な回答の割合の差



まとめ

これまでの比較から、東洋大学の調査結果を全国と比べて、全体としては大きな差異がなく同傾向だが、いくつかの特徴と差異が見られた。学習時間では「授業への出席」「予習・復習・課題など授業に関する学習」が全国よりも多く、特に「予習・復習・課題など授業に関する学習」が5時間以下の学生が、全国に比べて少ない。これはきわめて重要な結果である。また、「外国語の授業が多い」点も本学の特色となっており、「外国語の能力」（自己評価）に大きな影響を与えている。SGU事業への採択を契機とした努力を反映しているとみられる。「成長実感」について4年生は2年生との差が全国より大きい。他方で、「教員以外にアシスタントなどが配置され、補助的指導」については少し低い傾向がみられる。

ただし、今回の調査サンプルの構成などを考慮した確認が必要であり、また、分野別にもかなりの差異があるため、さらに分析する必要がある。回答傾向としてはこれまでのIR室の調査結果とほぼ一致しており、さらに組み合わせで分析すると、さらなる知見が得られる可能性がある。全国の傾向と大きく変わらない項目が多い中で、特色が出ている点もあることから、調査結果から何をくみ取るべきか、また学内で教員へどのように周知し、授業改善につなげてもらうべきか、全学で議論することが必要である。